

# 大学生における『居場所』\*

豊田 弘司・岡村 季光\*\*

(心理学教室)

**要旨：**大学生262人に「安心できる時」、「安心できる場所」及び「安心できる人」という3つの観点から『居場所』の自由記述を求めた。KJ法による分類を行った結果、『居場所』に独立と依存の両方を求める回答の多いことが示された。さらに回答理由を分類した結果、『居場所』に対してリラクゼーションを求める傾向とともに、他者を意識する傾向が強かった。これは対人関係性の影響を反映するものと解釈された。

**キーワード：**『居場所』、独立と依存、対人関係性

『居場所』という言葉は最近よく用いられている。これは、簡単にいえば「自分が安心していられる場所」である。文部省中学校課（1992）では、他者などとの相互作用により“今、ここにいる自分”を確認し、そこから存在感を実感することができると考えられている。『広辞苑』第5版によると、居場所とは「いるところ」「いどころ」と記載されているが、ここでいう『居場所』は単に空間的・物理的な対象だけではなく、心理的・社会的要因も含んだ対象であると考えられる。近年、学校や地域等で「居場所づくり」と称して様々な社会教育活動及び心理臨床活動が行われてきた（能重，1998；佐治ら，1995；坂本，1993；児童館・学童保育21世紀委員会，1995）。これらの活動の中で指摘されているのは、ただ物理的空間を提供するだけではなく、人と人との結びつき（対人関係性）を築かなければ、『居場所』が成立しないということである。また、社会教育学、精神医学及び臨床心理学の立場から『居場所』についての指摘がある（青木，1995，1996；萩原，1997；北山，1993；竹森，1999）。例えば青木（1995）は青年期の『居場所』は「同年輩の青年に出会う場」と「親や教師などの管理から自由な場」とであるととらえている。また、萩原（1997）は大学生に自らの『居場所』とは何であったかを自由記述させた。その結果から『居場所』とは、「私」とひと・もの・こととの相互規定的な意味と価値と方向の生成によってもたらされる“私”という位置である」と定義している。これらの研究は、『居場所』を自己と他者との関係からとらえていることの重要性を示唆するものである（竹森，1999）。

上述のような研究は時間、空間及び対人関係の視点から『居場所』をとらえることの重要性が示唆していることになる。これはまさに生態学的視点（Bronfenbrenner，1979,1995）及び「3間」（“さんま”）と呼称される（例えば内藤，1994）「時間」、「空間」及び「人間」の3つの観点から捉えようとする指摘と一致する。

これまでに『居場所』について関心は高く、実証的な研究はいくつか見られる（内藤，1997；中村，1998,1999；大久保・青柳，2000；白井，1998）。しかし、上述したような3つの観点から検討した研究は見られない。そこで、本研究では「時間（安心できる時）」、「空間（安心できる

---

\*"Ibasyo" (the Comfortable Place) in Undergraduates

\*\*Hiroshi TOYOTA and Toshimitsu OKAMURA (Department of Psychology, Nara University of Education, Nara)

場所)」及び「人間（安心できる人）」という3つの観点から、『居場所』を検討する。

## 方法

**調査対象** 調査対象は大学生262名（男子161名、女子101名）であり、平均年齢は19歳1か月（範囲18歳2か月～28歳11か月）であった。

**調査内容及び手続き** 集団調査を実施した。調査用紙としてA6判用紙を用い、1)「あなたにとって、安心できる時はいつですか？」2)「あなたにとって、安心できる場所はどこですか？」3)「あなたにとって、安心できる人は誰ですか？」の3問を設定した。そして各問に1つだけ回答するように求めた。また、各回答に対する理由も記述するように求めた。

## 結果と考察

**「居場所」の分類** 各回答をKJ法（川喜田，1967）によって分類し、「安心できる時」「安心できる場所」に関しては全体の5%以上の回答を、「安心できる人」に関しては全体の1%以上の回答を採用した。

「安心できる時」の分類は表1に示されている。ここには1次的睡眠欲求や依存欲求が反映されているといえよう。

表1 「安心できる時」の回答結果

回 答	男 子 n=161	女 子 n=101	全 体 n=262
寝る時	57 (35.4)	40 (39.6)	97 (37.0)
他者といえる時	16 (9.9)	22 (21.8)	38 (14.5)
好きなことをしている時	19 (11.8)	8 (7.9)	27 (10.3)
家にいる時	19 (11.8)	5 (5.0)	24 (9.2)
1人である時	13 (8.1)	11 (10.9)	24 (9.2)
お風呂に入っている時	11 (6.8)	4 (4.0)	15 (5.7)
なし	1 (0.6)	0 (0.0)	1 (0.4)
その他	25 (15.5)	11 (10.9)	36 (13.7)

( )内は%

「安心できる場所」の分類は表2に示されている。「自分の部屋」「自分の家」は、内藤（1997）が見出しした、「家族に守られた自分」及び「家の中の自分の部屋」と一致するものであった。

表2 「安心できる場所」の回答結果

回 答	男 子 n=161	女 子 n=101	全 体 n=262
自分の部屋	64 (39.8)	38 (37.6)	102 (38.9)
自分の家	50 (31.1)	36 (35.6)	86 (32.8)
寝具	11 (6.8)	10 (9.9)	21 (8.0)
なし	1 (0.6)	1 (1.0)	2 (0.8)
その他	35 (21.7)	16 (15.8)	51 (19.5)

( )内は%

「安心できる人」の分類は表3に示されている。加藤（1977）は、青年の独立性、依存性の意識を明らかにするため、「父」「母」「きょうだい」「親類の人」「先生」「同性の友人」「異性の友人」「上級生や先輩」「自分」及び「神（仏）」の10の対象を示し、「共にいるとき心の落ち着く相手」「困ったとき意見を重んずる相手」「これからの人生で心の支えになる相手」の3つの観点のもとに、順位付けを行っている。各対象への相対的依存度を分析した結果、大学生では男女ともいずれの観点においても「自分」に対して1位を選択する割合が高かった。本研究では「安心できる人」という教示で行っているため単純に比較できないが、男子の回答は加藤（1977）の結果と一致していた。従来から青年期には第2の個体分離化（Blos, 1967）がなされ、心理的な独立の時期であると指摘されている。一方、近年では青年が親などの他者への依存をまだ断ち切れない状態であるという指摘も認められる（例えば松井, 1996）。本研究の結果は、まさに、このような「自分」を心の拠り所とする者と他者に依存する者がともに存在することを示しているデータといえよう。

表3 「安心できる人」の回答結果

回 答	男 子 n=161	女 子 n=101	全 体 n=262
自分	57 (35.4)	14 (13.9)	71 (27.1)
母親	21 (13.0)	39 (38.6)	60 (22.9)
友人	38 (23.6)	19 (18.8)	57 (21.8)
恋人	12 (7.5)	9 (8.9)	21 (8.0)
きょうだい	8 (5.0)	7 (6.9)	15 (5.7)
祖父母	3 (1.9)	2 (2.0)	5 (1.9)
父親	2 (1.2)	2 (2.0)	4 (1.5)
なし	3 (1.9)	0 (0.0)	3 (1.1)
その他	17 (10.6)	9 (8.9)	26 (9.9)

( )内は%

性差に関して独立性の検定 ( $\chi^2$ 検定)を行った<sup>2)</sup>結果、「安心できる場所」では有意でなかった ( $\chi^2_{(3)}=2.14$ ) が、「安心できる時」及び「安心できる人」では有意であった ( $\chi^2_{(6)}=13.03$ ,  $p < .05$ ;  $\chi^2_{(6)}=29.01$ ,  $p < .001$ )。残差分析の結果、「安心できる時」では「家にいる時」が男子に多く、「他者といる時」は女子が多かった。「安心できる人」では「自分」が男子の方が多く、「父・母・祖父母」では女子の方が多かった。この結果は、男子に比べて女子の方が対人依存欲求が高いことを反映しているものと考えられる。

**【居場所】3側面間の関係** 「安心できる人」に「自分」と回答した群を「自分」群 (n=71)、「母親」「父親」「きょうだい」及び「祖父母」を回答した群を「家族」群 (n=84)、「友人」及び「恋人」を回答した群を「友人・恋人」群 (n=78)に分類した。「安心できる人」の各群と「安心できる時」及び「安心できる場所」との独立性の検定 ( $\chi^2$ 検定)を行った結果、「安心できる人」と「安心できる場所」において、「自分」群では「自分の家」という回答は少なく、「自分の部屋」は多かった。反対に、「家族」群では「自分の家」という回答は多く、「自分の部屋」は少ない傾向があった ( $\chi^2_{(6)}=17.41$ ,  $p < .01$ )。

**【居場所】選択理由の分類** 「安心できる時」及び「安心できる場所」においては上位3位までの回答群を対象に、「安心できる人」においては「自分」群、「家族」群及び「友人・恋人」群別に、その選択理由をK J法 (川喜田, 1967)によって分類した。群全体の5%以上の回答を採

用した結果が表4～6に示されている。

「安心できる時」及び「安心できる場所」で“落ち着くから”“何も考えないから”という回答が多く、リラクゼーションを志向する傾向が認められる。一方、“他者の干渉がない”“他者に気を遣わずにすむ”“1人じゃないから”とみられるように、『居場所』に対して他者を意識している傾向も認められる。

表4 「安心できる時」上位回答群選択理由

選択理由	度数
「寝る時」	
何も考えないから	27 (27.8)
あとは寝るだけだから	24 (24.7)
落ち着くから	22 (22.7)
自由だから	5 (5.2)
何となく・無回答	6 (6.2)
その他	13 (13.4)

表5 「安心できる場所」上位回答群選択理由

選択理由	度数
「自分の部屋」	
自分だけの領域だから	33 (32.4)
落ち着くから	21 (20.6)
他者の干渉がない	12 (11.8)
自由・好きなことができる	10 (9.8)
何となく・無回答	6 (5.9)
その他	20 (19.6)

表6 「安心できる人」上位回答群選択理由

選択理由	度数
「自分」群	
他者を信用できない	18 (25.4)
自分が一番の理解者	6 (8.5)
対人関係が煩わしい	5 (7.0)
他にいない	5 (7.0)
何となく・無回答	22 (31.0)
その他	15 (21.1)

選択理由	度数
「他者といる時」	
落ち着くから・楽しいから	9 (23.7)
1人じゃないから	7 (18.4)
素直になれるから	6 (15.8)
信頼できるから	5 (13.2)
他者に気を遣わずにすむ	2 (5.3)
何となく・無回答	5 (13.2)
その他	4 (10.5)

選択理由	度数
「自分の家」	
気を遣わずにすむ	20 (23.3)
落ち着くから	17 (19.8)
慣れているから	11 (12.8)
家族等がいるから	10 (11.6)
自由・だからできる	8 (9.3)
何となく・無回答	8 (9.3)
その他	12 (14.0)

選択理由	度数
「家族」群	
信頼できる・裏切らない	13 (15.5)
身近にいる・身内だから	13 (15.5)
理解してくれる	10 (11.9)
ありのままにいられる	10 (11.9)
何となく・無回答	10 (11.9)
その他	28 (33.3)

選択理由	度数
「好きなことをしている時」	
他のことを考えないから	8 (29.6)
落ち着くから	5 (18.5)
好きだから	4 (14.8)
その他	10 (37.0)

選択理由	度数
「寝具」	
心地よいから	6 (28.6)
寝られるから	6 (28.6)
何となく・無回答	4 (19.0)
その他	5 (23.8)

選択理由	度数
「友人・恋人」群	
気を遣わない・気楽	12 (15.4)
信頼できる・裏切らない	11 (14.1)
なんでも言い合える	11 (14.1)
理解してくれる・気が合う	10 (12.8)
好きだから	6 (7.7)
落ち着く・安心できる	5 (6.4)
何となく・無回答	12 (15.4)
その他	11 (14.1)

( )内は%

( )内は%

( )内は%

泊・吉田(1998)によれば、「社会的役割から離れて、他者の目を気にせず自由に振る舞える自分固有の領域(時間や空間)」はプライベート空間と呼ばれ、「1人になれる空間」と「緊張解消」「課題への集中」及び「自己内省」の間には、正の相関関係のあることが明らかにされている(泊・吉田, 1999)。本研究の結果と合わせて考えると、「自分」に安心を感じる者は「自分の部屋」という自分だけの領域の中で他者からの目を意識することなくリラックスし、自分を見つめ直す機会が多い。一方、「家族」に安心を感じる者は家族のいる「自分の家」の中で落ち着く傾向のあることが示唆されよう。

また「安心できる人」の選択理由をみると、「自分」群は“他者を信用できない”というよう

な他者否定の傾向があり、「家族」群及び「友人・恋人」群は“信頼できる”という他者肯定の傾向がある。これは「自分」群が他者に対する信頼感や、他者が自らの理解をしてくれるという社会的文脈を十分に経験していない可能性をうかがわせる。一方「家族」群及び「友人・恋人」群はそのような経験を十分にしていることが反映されていると考えられる。

註) 検定の際には、度数が0の項目及び期待値が5未満の項目をなくすため、すべての“その他”及び“なし”項目、「安心できる人」に関してはさらに“父親”“母親”及び“祖父母”項目をそれぞれ併合した。下記の独立性の検定も同様の措置を行った。

## 引用文献

- 青木省三 1995 青年への援助と治療とはどのようなものか 青木省三・清水将之(編) 青年期の精神医学 金剛出版 Pp.13-31.
- 青木省三 1996 思春期 こころのいる場所 岩波書房
- Blos, P. 1967 The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 22, 162-186.
- Bronfenbrenner, U. 1979 *The ecology of human development*. Harvard University Press.  
磯貝芳郎・福富 護(訳) 1996 人間発達生態学 川島書店
- Bronfenbrenner, U. 1995 Developmental ecology through space and time. In P. Moen, G. H. Elder, Jr. & K. Luscher (Eds.), *Examining lives in context: Perspectives on the ecology of human development*. American Psychological Association. Pp.619-648. (やまだようこ 1998 生涯発達 下山晴彦(編) 教育心理学Ⅱ 発達と臨床援助の心理学 Pp.13-39. より)
- 萩原建次郎 1997 若者にとっての「居場所」の意味 日本社会教育学会紀要、33, 37-44.  
児童館・学童保育21世紀委員会(編著) 1995 21世紀の児童館学童保育Ⅱ 児童館・学童保育と居場所づくり—子どもの生活に躍動と癒しの拠点を 萌文社
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己の独立性と依存性 青年期における自己意識の構造(心理学モノグラフNo.14) 東京大学出版会、Pp.49-69.
- 川喜田二郎 1967 発想法 中公新書
- 北山 修 1993 自分と居場所 岩崎学術出版社
- 松井 豊 1996 親離れから異性との親密な関係の成立まで 斎藤誠一(編) 人間関係の発達心理学4 青年期の人間関係 培風館 Pp.19-54.
- 文部省中学校課 1992 登校拒否(不登校)問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して(学校不適応対策調査研究協力者会議報告) 教育委員会月報, 44, 25-29.
- 内藤哲雄 1997 「居場所」に関するPAC分析 日本教育心理学会第39回総会発表論文集、201.
- 内藤 徹 1994 子どもをウォッチングしよう—子どもの発達のとらえ方 増田公男・山崎勝之・大木祐治・内藤 徹 発達心理学からの展望—子どもの心の育ち方 北大路書房 Pp.1-16.
- 中村泰子 1998 居場所イメージに関する検討—連想語の調査を通して— 日本心理学会第62回大会発表論文集、138.
- 中村泰子 1999 「居場所」尺度とYG性格検査との関連性—○△□法の基礎的研究として 日

- 本教育心理学会第41回総会発表論文集、182.
- 能重真作 1998 居場所を求める子どもたち あゆみ出版
- 大久保智生・青柳 肇 2000 心理的居場所に関する研究(2) — 居場所感尺度作成の試み — 日本教育心理学会第42回総会発表論文集、161.
- 坂本昇一 1993 登校拒否のサインと心の居場所 小学館
- 佐治守夫(監修) 岡村達也・加藤美智子・八巻甲一(編著) 1995 思春期の心理臨床 学校現場に学ぶ「居場所」づくり 日本評論社
- 白井利明 1998 若者に居場所はあるのか 大学進学研究、108, 54-59.
- 竹森元彦 1999 心の発達における居場所の役割 鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)、14, 127-136.
- 泊 真児・吉田富二雄 1998 プライベート空間の心理的意味とその機能 — プライバシー研究の概観と新たなモデルの提出 — 筑波大学心理学研究、20, 173-190.
- 泊 真児・吉田富二雄 1999 プライベート空間の機能と感情及び場所利用との関係 社会心理学研究、15, 77-89.